

(2) 第57回広島県特別支援教育研究大会広島大会 第1分科会

～汎化を目指した、生きる力をはぐくむ日常生活の指導～

ア 小学部第2学年単一学級の取組

(7) 付けたい力

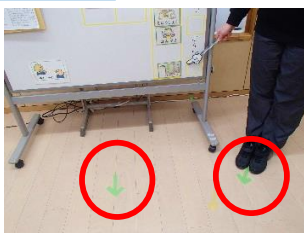
- 自ら考えて行動する力
- 友達とかかわる力
- 自分で考えて、決めて、動く力

(イ) 題材の目標

- 朝の会の流れを理解し、自ら進んで朝の会を行うことができる。
- 友達に伝わった、友達から教わったという経験を通して、相手に伝わりやすい表現の仕方を工夫することができる。


(ウ) 環境づくり

物理的支援環境 ① 教材・教具、支援ツールの効果な配置



友達の方へ体を向けて発表したり、やり取りをしたりすることができるように、体の方向を示す矢印を床に付ける。

物理的支援環境 ② 児童生徒の発達段階や障害特性に合った支援ツールの活用



自分や友達の係が分かるように、係の順番や担当が分かるボードを使用する。今はどこなのか分かるように黄色い枠で示す。

人的支援環境 ③ 教師の役割



活動がより明確になるように、児童の席より前に位置取る。また、今の活動を指し示す。

人的支援環境 ③ 教師の役割



児童自ら表現ができるように、STがヒントカードを示す。

人的支援環境 ④ 児童生徒の役割



主体的に係ができるように、やりたい係を自分で決めた後、自分たちで係の準備をする。

人的支援環境 ④ 児童生徒の役割

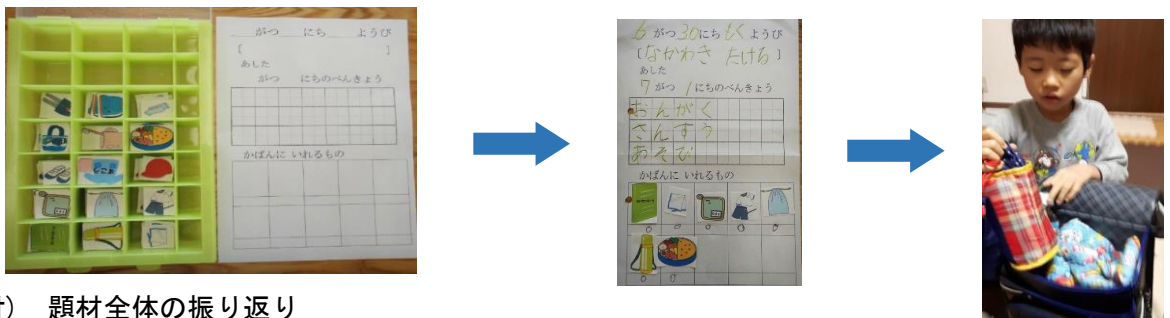


友達を見て友達とやり取りをしながら、今日の予定を伝える。

(イ) 児童の変容(環境づくりに視点を当てて)

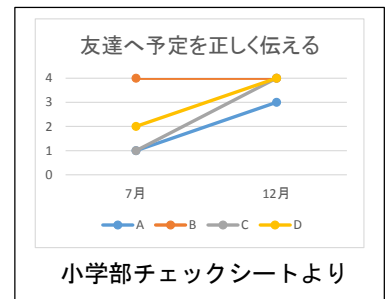


上の左の写真は、一見児童同士のかかわりがあるように見えるが、作業的で会話も成り立たないことが多かった。本学級の児童に関しては教師がつなぎ役となり、要所要所で会話を成立させ、活動にめりはりを付けることで、会話のやり取りも増えていった。また、その場ですぐに教師から褒められることにより更に意欲的になり、児童が自分から活動できたり、他の児童の係の様子を見たりするなど、友達や教師と活動を共有する楽しさを感じているような笑顔も増えていった。また、下の写真のような手順で、汎化を目指して家庭との連携を図ることに取り組んだ。学校での生活ノートの取組を家庭でも行うことで、自分から次の日の準備を行うことができるようになり、定着していった。



(オ) 題材全体の振り返り

環境づくりの四つの視点に着目して様々な取組をしていく中で、自己選択の機会を設けたことにより、自分の気持ちを表現することができるようになってきた。また、みんなの前で表現することで、体の向きを考えて伝わる声で話ができたり、やり取りの会話や予定を正しく伝えたりすることができるようになってきた。更に、朝の会で自分の役割を果たすことで、家庭でも自分のことは自分でする機会が増えてきた。



(カ) 指導助言

助言者 広島市教育センター 主任指導主事 戸田美鈴 様

子どもの「わかる」、「できる」をつなぐためには、教師は授業の中で様々な機会を見逃すことなく、褒める機会を増やしていくことが大切である。教育的瞬間を見逃すことなく何が良かったのか、子どもに分かるように、具体的に褒める。この、「できた!」「うれしい!」「楽しい!」の実感の積み重ねが、「やった!」「またやろう!」と感ずることにつながる。では、どこで褒めれば良いか。すでにできていることを褒められても達成感にはつながらない。それには、「わかる」、「できる」ための具体的な評価規準を設定することが必要である。的確な実態把握とこれまでの到達度、それに合った具体的評価があつてこそ生きてくる。分かるための物理的支援があれば、人的支援は減る。何度も説明したり、個別に指導したり、注意したりする回数が減る→先生の言葉が減る→子どもの活動時間が増える。そうすることにより子どもの「わかる」、「できる」が引き出されていく。